第四編　教育・文化

第一章　教育委員会

第一節　教育委員会

教育委員会法が改正されて以来、その職務権限は「地方教育行政の組織運営に関する法律」に示された、地方公共団体が処理する事務、法律・政令に基づく教育の一切を扱っている。

事業

一、小・中学校施設整備の充実
一、美川西小学校屋内運動場建設審議推進
一、美川西小学校児童便所改築審議推進
一、美川中央中学校水泳プール建設審議推進
一、愛媛県へき地教育研究大会の推進
一、小・中学校学習交流の推進
一、中学校統合審議推進

氏名	期間	備考
大家　常行	四七・一〇・一～五一・九・三〇	四七～五一委員長
天野　輝雄	四七・一〇・一～五〇・四・一〇	
木下　久敬	四八・一〇・一～五〇・四・六	教育長
大野　利一	四九・六・一八～五〇・九・三〇	
坪内　要	四九・一〇・一～五三・九・三〇	五一～五三委員長
畝　繁雄	五〇・四・七～五〇・六・二二	教育長職務代理者
平柳　修一	五〇・六・二三～五一・九・三〇	
新谷養一郎	五〇・六・二三～五二・九・三〇	教育長
正岡　剛	五〇・一〇・一～五四・九・三〇	
平柳　修一	五一・一〇・一～五五・九・三〇	
岡林　勇	五一・一〇・一～五五・九・三〇	五三～五五委員長
新谷養一郎	五二・一〇・一～五六・九・三〇	教育長再任
中平　瞭	五三・一〇・一～五七・九・三〇	
正岡　剛	五四・一〇・一～五八・九・三〇	五五～五八委員長
高山　猛	五五・一〇・一～五九・九・三〇	

氏名	期間	備考
佐藤　稔	五五・一〇・一～五九・九・三〇	五九委員長
新谷養一郎	五六・一〇・一～現在	教育長再任
中平　瞭	五七・一〇・一～五八・三・三一	
山本田鶴子	五八・四・一～現在	
正岡　剛	五八・一〇・一～現在	
高山　猛	五九・一〇・一～現在	委員長
木山　徳重	五九・一〇・一～現在	

第二章　学校教育

第一節　中学校統合

過疎化の進む中、昭和四九年三月三日の村議会で美川村教育委員会の、統合に関する基本方針が公表された。各小学校単位の六会場で、学校教育の現状と長期展望に立った説明をし、村民と率直な意見交換がなされた。しかし、結果的に時期尚早と、統合の夢は消えるかに思われたが、五一年美川村学校問題プロジェクトチームが編成された。小規模校の問題点・学校統合の長所・学校統合推進上の問題などについて、あらゆる資料により検討し、同年一二月一五日美川村長に学校問題に関する報告がなされた。

まず、中学校の統合については、村の自主財源が多額を要する。したがって、現状では統合には困難性があるので具体的な基本方針で対処する。

一、財源の蓄積
一、基金条例の制定
一、統合計画のめど
一、条件整備

内容

一、統合の財源に充てるため年次計画により、毎年予算の範囲内で積み立てる。

二、統合に伴う基金として明確にするため、基金条例を制定する。

三、基金総額がおおむね二億円程度になれば、更に内容検討し実現に踏み切る。

四、統合問題に起因する、それぞれの前提となる条件整備について努力し、関係機関の協力を要請する。

各小学校においては、地域の盛衰にかかわる問題であり、あらゆる角度から総合的に検討し、住民意識の統一を図り慎重かつ英断をもって対処しなければならない。しかし、通学距離と体力の問題をはじめ総合的に諸条件を検討した結果、現状を維持しながら教育効果を図ることとした。ただし、小規模校化が進む中での教育効果を高めるため、創意工夫と地域に根ざした特色ある学校教育を進め行政と学校・地域が一体となり、学校教育実現を目指す答申がなされた。

この答申を基に、昭和五七年美川村教育委員会は、中学校統合に関する基本的な調査基礎資料を作成。三校同時統合を決定し、村長に報告した。五八年七月学校施設整備委員会を発足、一年三か月にわたり、延べ三六会場で村民の理解を求める懇談会を重ね、五九年一二月定例村議会において、中学校設置条例が制定された（昭和六一年四月一日開校）。六〇年四月一日から、建築工事に着手の運びとなる。

学校問題プロジェクト班

氏名	職名	氏名	職名
チーフ　山下傳三郎	助役	高木松太郎	議会議長

長岡　道一	収入役
坪内　　要	教育委員長
小田原英雄	総務課長

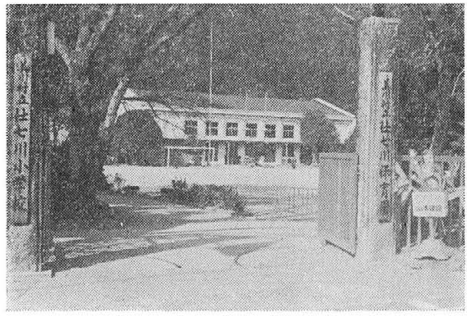
天野　輝雄	議会文教厚生委員長
新谷養一郎	教育長

学校施設整備委員

氏名	職名	氏名	職名
片岡　　傳	議会議長	高山　　猛	教育委員長
木下　久敬	議会副議長	山本田鶴子	教育委員
土岐　博隆	議会総務委員長	佐藤　　稔	教育委員
高木　秀雄	議会産業建設委員長	正岡　　剛	教育委員
天野　輝雄	議会文教厚生委員長	猪上　俊彦	地域振興委員会会長
高岡　　稔	議会文教厚生副委員長	土居　　修	村ＰＴＡ連合会長
篠崎　義雄	議会文教厚生委員		

第二節　各学校の沿革

一　仕七川小学校



仕七川小学校

昭和三〇年四月仕七川小学校と校名が改称され、今年で三〇年目を迎える。

昭和三〇年から五〇年までの本校のあらましについては、「美川村二十年誌」に記しているので、以後の一〇年間の歩みについてまとめてみる。

ここ一〇年の間にも、本村の過疎化は進み、それにつれて学校の小規模化もとどまることをしらず、昭和五〇年には児童数も一〇三名を数えていたが、一〇年後の現在は五四名と半減し、複式学級一つを持つ極小規模校となってきた。

今後まだまだ児童数の減少は続くことが予想される。

一　施設・設備の充実状況

年度	内容
五〇	職員室裏の池の完成
	北校舎前の足洗い場の完成
	給食室横の運動場排水路の完成
五一	遊具のペンキ塗装
五三	北校舎便所、南校舎手洗い場の工事
	南校舎外部の全塗装
	南校舎裏の鉄柵取り付け
五五	講堂外部の塗装
	渡り廊下の屋根修理
	足洗い場の水道工事
五六	講堂内部の塗装
	教室の床修理（南校舎二階三教室）
五七	教室の電灯増設工事（六教室）
	通路のコンクリート舗装
五八	講堂の屋根葺き替え
	北校舎便所の土間のコンクリート打ち込み及び塗装
	給食室の修理及び塗装
	スチール黒板の取り付け（三教室）
五九	給食室裏の石垣補強修理
	掲示板の塗装（六教室及び廊下）
	管理棟（職員室）西側の窓のアルミサッシ取り付け
	南校舎の便所塗装
	講堂の暗幕取り替え
	小鳥小屋の修理

二　主要行事

年度	内容
五〇	同和教育講演会
五一	村内低学年部研究会
五二	上浮穴郡家庭科研究会
五三	幼児教育研究会
	村校長会研究会
五四	上浮穴郡幼児教育研究会
	村内小学校交流学習会
	美川まつり音楽演奏会出場
五五	上浮穴郡理科研究会
五七	上浮穴郡教育研究大会
五九	愛媛県へき地教育研究大会

三　表彰関係

年度	内容
五三	青少年赤十字
五七	県共済農協連合会習字コンクール（優秀学校賞）
五八	県共済農協連合会習字コンクール（優秀学校賞）
五九	小さな親切運動図画・習字コンクール
	柔剣道スポーツ少年団

四　特記事項

○愛媛県へき地教育研究大会開催

昭和五八年四月、愛媛県へき地教育研究校として二年継続の指定を受け、五九年一一月次のような研究主題と実践化をめざす基本構想により発表をした。

一　研究主題

「へき地小規模校の特性を生かし、個人及び集団の活力を高める学習指導の研究と実践」

―個に徹し、どの子も伸ばす学習指導―

二　実践化をめざす基本構想

(1)　個に徹し、どの子も伸ばす学習指導

(2)　表現意欲を高め、個性を生かす指導

(3)　はげまし合い、みがき合う児童集団づくり

この研究大会は、本校職員にとっては最初であり最後かもしれないという気構えで、お互いの持てる力を最大限に発揮して研究に取り組んだ。子供たちが大きく変容してくれたことは教師にとって、この上もない大きな自信となった。

各方面の御指導と強力な支援協力体制を得て、大会は成功裏に終了することができた。

二　東川小学校

東川小学校

昭和三〇年三月美川村発足に伴い、美川村立東川小学校と校名が改称され、現在に至っている。当時の本校のあらましについては「美川村二十年誌」に記されているので、昭和五〇年以降一〇年間の変遷を年度を追って記載した。

この一〇年間における本校児童数の推移をみると、一段と過疎化現象の進んでいることがよくわかる。つまり、昭和五〇年度には児童数四三名で、複式二学級を含む四学級であった。現在は児童数一五名となり、複式二学級を含む三学級の極小規模校である。今後も児童数の減少は続くものと予想される。

一　施設・設備の充実状況

年度	内容
五〇	講堂内部壁のペンキ塗装
五一	「三和」記念碑建立・夜間照明設備完成・創立百周年記念式典挙行・記念事業実施・南校舎二階の南側外壁改修
五二	校舎裏土止工事完成・運動場フェンス遊具の移動と農道の付け替え
	国旗掲揚台、鉄製ポール取り付け
五三	南北両校舎の屋根葺き替え
	南男子用便器取り付け
五四	校門内の通路、コンクリート舗装
	校内の電気配線改修
五五	砂場新設・北便所改修
五六	南校舎二階南側の窓、サッシ化
五七	運動場周囲の防球ネット完成
	北側校舎横のフェンス新設
	焼却場への通路新設、舗装
五八	給食室への通路新設、舗装、講堂東側の窓サッシ化・複式学級二教室へ黒板新設・水源地の水槽タンク取り替え
五九	講堂入口の屋根ペンキ塗装・給水パイプ三和橋へ付け替え・給食室流し台新設、天井補修・給食用椎茸栽培開始

二　主要行事

年度	内容
五〇	村内小学校低学年部研究会
五一	村幼児教育研究会

五二	上浮穴郡複式教育研究大会
五五	上浮穴郡複式教育研究大会
五六	村幼児教育研究会
五八	上浮穴郡社会科複式教育研究大会 村内小・中学校研究大会

三　表彰関係

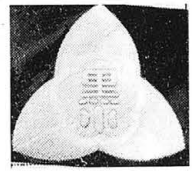
年度	内　容
五一	東川子ども会（県表彰） 県共済農協連合会習字コンクール（優秀学校賞）
五三	県共済農協連合会習字コンクール（優秀学校賞）
五八	東川子ども会（郡表彰）

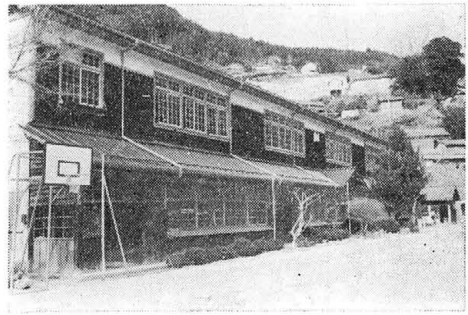
四　その他

年度	内　容
五六	全国学力達成度調査抽出校
五八	県教育研究グループ補助金交付

創立後、一〇八年の輝かしい歴史と伝統に支えられた本校は、児童数の減少という問題はあるが、今後も東川地区の教育の殿堂として教育活動が継承されるであろう。

三　黒藤川小学校





黒藤川小学校

この一〇年間の過疎化の波は、本校にも大きな影響をもたらした。

昭和五〇年度には、児童数八八名、六学級であったが、本年度は、児童数二三名、複式の三学級編制で、教職員も五名となった。その推移の状況を記しておこう。

年度	児童	学級	教員	年度	児童	学級	教員
五〇	八八	六	九	五六	三五	四	六
五一	七九	六	一〇	五七	三〇	四	六
五二	六四	六	九	五八	二七	四	六
五三	五二	五	七	五九	二三	三	五
五四	五一	五	七	（六〇）	二〇	三	五
五五	四〇	五	七				

一　施設・設備の充実

年度	内容	年度	内容
五〇	校舎の補強工事　小鳥小屋新設	五六	音楽室設置（普通教室を資料室と仕切る）
	机・いすスチール化（三年次）	五七	校舎の屋根全面修理（カラーボード）小鳥小屋移転、灯油置場新設
五一	雲梯・つり輪新設　給食室の修理		
五二	校舎の西側の窓修理（アルミサッシ窓）	五八	保健室新設（宿直室改装）給食室修理　タイプライター購入
	放送設備の更新　防球ネット設置		運動場フェンス張り替え（五八～五九年度）
五三	ビデオ機器の購入　便所の修理		
五四	校舎屋根の修理　給食室修理	五九	普通教室に前面黒板設置
五五	二階廊下・集会室・職員室・校長室の床の張り替え		校旗新調（後援会）便所裏石垣補強

二　主な行事

年度	内容	年度	内容
五〇	上教研教科研究会（国語）※上浮穴郡教育研究協議会	五三	上教研教科研究会（体育）
五二	村内高学年部会研究会（算数）	五六	上教研教科研究会（算数）

五七	村内交流学習会（仕七川小学校、二篦小学校）
	郡内音楽発表会に全校児童参加（器楽）
五八	村内校長研修会
	県同和教育課指導訪問
五九	管内複式学級学習指導講座会場校
	郡内教頭研修会会場校
	特別活動研究校（上教研・59～60）
	小規模校協同学習研究指定校（県・59・60）
	（協力校＝美川南小・二篦小）

三　表彰等

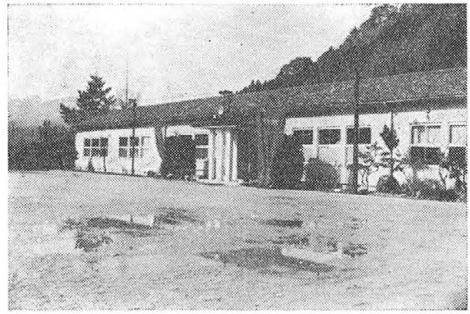
年度	内容
五四	全日本よい歯の学校表彰（全国）
五五	全日本よい歯の学校表彰（全国）
五七	郡ＰＴＡ大会優良こども会
五八	ハート記念財団より教育設備助成を受く
五九	郡ＰＴＡ大会優良愛護班

現在の校舎は、昭和一四年二月着工、一六年七月に落成式を挙げている。その後の破損もひどく、現在、老朽危険校舎に指定されている。六一年四月には、美川中学校発足とともに、現在の黒藤川中学校へ移ることになっている。

消えゆく校舎、年々減少する児童数……衰勢の感がないでもないが、子供たちは、明るく純朴。地域の人々も人情豊かで、学校への協力を惜しまない。この八月、校区全戸の温かい御協力で校旗を新調していただいた。

この黒藤川小学校に寄せる地域のかたがたの熱い思いの秘められたこの校旗の下に、児童・教職員一丸となって、すばらしい歴史と伝統を継承・発展させようと、決意を新たにしている次第である。

四　二箆小学校



二箆小学校

美川村二十年誌に続き昭和五〇年度以降一〇年間の本校の歩みをまとめてみる。双生矢竹などもあり、伝説も多い地区であるが、高度成長の波は山村にも就業など諸面に大きな変化をもたらした結果、人口の流出、高齢化が進んでいる典型的な過疎地である。

開校当時は、本校八七名、沢渡分校四〇名、計一二七名を数えたが、五〇年度では三〇名、五九年度は三名にまで減少している。しかし、郷土の自然を愛する気持ちに変わりなく、毎日の学習に励んでいる。

一　施設・設備の充実状況

年度	内容	年度	内容
五〇	土間コンクリート完成	五六	遊具鉄製に改修
五一	学校用車道完成		国旗掲揚台改修
	体育倉庫大修理	五七	玄関屋根を全面改修
	アコーディオンカーテン及び舞台幕設備		校門排水溝を敷設
五三	バスケットゴール・防球ネット設置		本館南側窓アルミサッシに改修
五五	グラウンド夜間照明完成		危険物保管庫新設（灯油）
五五	本館屋根大修理		

二　主要行事

年度	内容	年度	内容
五〇	上浮穴郡道徳研究会	五一	郡・地教委・校長会・合同訪問

五三	美川村幼児教育研究会
	美川村ＰＴＡ指導者研修会
	美川村複式教育研究大会
五四	上浮穴郡複式学習研究指定校
	上浮穴郡・美川村複式指導研究会
五五	愛媛県教育委員会・松山教育事務所合同訪問
	美川村校長会
五六	美川村小学校（Ａ班）交流学習
五九	美川村小学校（Ａ班）交流学習

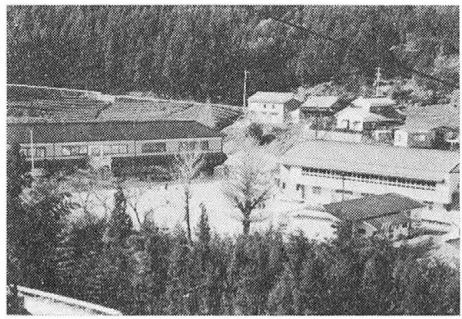
三　表彰等

年度	内　容
五三	愛媛県優良ＰＴＡ校（県ＰＴＡ連合会）
五五	上浮穴郡優良子供会、二篦子供会（郡ＰＴＡ連合会）
五六	愛媛県優良子供会、二篦子供会（県ＰＴＡ連合会）
五七	愛媛県交通安全優良校（愛媛県警察署・愛媛県交通安全協会）
五八	優良愛護班、二篦愛護班（郡ＰＴＡ連合会）
五九	住民運動推進意識高揚、学校表彰（久万地方推進協議会）
五九	文部大臣奨励賞（木版画）六年大野早苗（伝統的工芸品産業振興協会）

昭和五七年度から教頭の配置がなくなり、続いて五九年度から、校長は黒藤川小学校と兼務ということになった。児童数は減少しているが、素直で純朴な本校の児童にとって最も必要とされるのは、社会連帯感の育成であ

る。集団の中の一人、社会に生きている一人であるという社会連帯感を育んでいかなくてはならない。そのため本校では、児童一人一人を見つめ、その個性、能力をじゅうぶん引き出すことができるよう個に徹する指導を実践している。また、その個々の能力を全体の中で生かすべく、『考える子』『がんばる子』『やさしい子』『はたらく子』といった本校の児童像を設定している。そして、個性豊かな人間性を持ち、しかも、社会連帯性をも兼ね備えた調和のとれた人間づくりを目指して努力している。

五　美川西小学校



美川西小学校

昭和五〇年代一〇年間の西小の歩みで特筆すべきことは、何んといっても体育館（美川西小学校屋内運動場）の落成であろう。郡内屈指と称されるこの体育館は、開校百周年・現在地移転五十周年の記念事業として、村当局の英断と校区住民の熱い思いが結集して完成したものである。

以来、学校体育はもちろんのこと、社会体育の殿堂として、また、学校行事・各種の社会教育関係行事などの中心会場としてその機能をいかんなく発揮している。

（昭和五四年三月二〇日・式典挙行）

一　施設・設備の充実状況

年度	内容	年度	内容
五〇	駐車場完成	五六	校長住宅落成・校地内教員住宅廃止
五一	校舎補修工事（床・廊下等） 校舎内塗装工事・給食調理室改造	五七	校舎外壁塗装工事完了 体育館への通路完成・玄関前通路舗装校門門柱完成（寄付）
五二	校舎西側土手改修	五八	校内通路コンクリート舗装完成
五三	体育館新築落成・開校百周年・現在地移転五十周年記念碑建立	五九	校訓碑建立（教育振興会事業） （校訓　学ぶ子・強い子・やさしい子） 校舎南水路改修・校舎南側排水工事
五四	校舎床補修工事		
五五	車庫移転完了（幼稚園北側） 校舎南側窓アルミサッシに改修		

二　主要行事

年度	内容	年度	内容
五〇	美川村体育研究会	五四	上浮穴郡教科研算数研究会
五一	上浮穴郡学校給食研究会 美川村社会科研究会	五五	同和教育巡回指導訪問 美川村学級経営研究会

五六	郡地教委協議会・郡校長会合同訪問
	美川村ＰＴＡ研究大会
五七	美川村内校長研究会
	上浮穴郡社会教育研究大会
	上浮穴郡教科研体育研究会
	上浮穴郡教頭研究会
五九	上浮穴郡幼児教育研究会（幼小関連）

三　表彰等

年度	内　容
五一	環境美化表彰（県生活運動推進協議会）
五二	子ども貯金組合表彰（四国郵政局長）
五六	子ども貯金組合表彰（四国郵政局長）

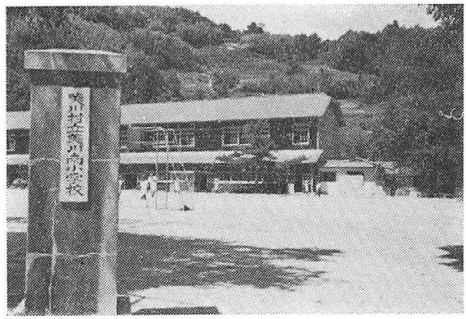
四　特記事項

○小規模化・複式化

昭和三〇年代当初（西小発足当時）は児童数は三〇〇名を超え八学級の学校規模であったが、過疎化の進行による児童数の減少により、五七年度から複式校となる。（児童数五四・学級数五）

少人数・複式学級と学校の現実は厳しいものがあるがここに教育の原点を求め、少人数・複式の劣性と見られるものを転じて優性とすべく、校訓「学ぶ子・強い子・やさしい子」の具現化をめざし、地域あげての理解と協力を得て、個に徹した師弟同行の教育活動を展開している今日である。

六　美川南小学校



美川南小学校

美川村二十年誌に続き、昭和五〇年度以降一〇年間における、本校の歩みの概要を記すこととする。

科学技術の進歩、経済の発展に伴い、人口の都市集中、山村の過疎化が急速に進むにつれ、終戦当時（昭和二〇年）二七一名であった児童数も、三〇年には二四一名、四〇年・二〇二名と徐々に減少し始め、五〇年には九四名、五九年現在、わずか二八名と急激に減少してしまった。

こうした中にあっても、いにしえの文化の里の誇りと、地縁生産共同体として、地域に根づいている連帯意識、やさしい心情、たくましい勤労意欲にはぐくまれた伝統的精神の上に、校訓碑に刻まれた『未知を拓(ひら)く』の精神の具現化を目指し、「気づき考え実行する」を合い言葉に、自主的積極的で、実践力のある南小の児童が育っている。

一　施設・設備の充実状況

年度	内容
五〇	台風五号により飛散した校舎屋根（一教室）・倒壊した物置を補修
	傘棚及び履物棚を土間に新設
	飲料水滅菌器設置
五一	ＶＴＲ等視聴覚機器を購入
	給食室前・理科室裏をアスファルト舗装便所・校舎の外壁を修理
	道路横に駐車場を新設
五二	階下に集会室（二教室分）完成
	伸びよ明るくたくましくの校訓碑を設置
	鳥舎並びに標高（標高三六五メートル）碑設置
五三	創立百周年記念碑「未知を拓く」、少年少女像設置・ピアノ購入・校舎外壁塗装
五四	音楽室改装
五五	放送設備を更新・グランドピアノ購入
五六	校舎北面窓をアルミサッシ化
	給食室・保育園への渡り廊下新設
	駐車場を舗装
五七	防球ネット設置・バス停待合所新設
	台風一三号により校舎北側崖崩れ発生、同土止、崖崩れ防止工事実施
五八	給食室内部一部改修・北側排水工事完了
五九	便所建替え・給食室内部改装完了
	国旗掲揚ポールスチール化、温室設置

二　主要行事

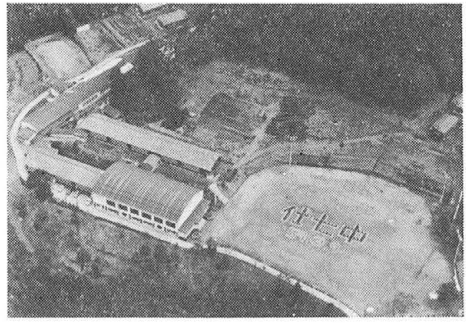
年度	内容	年度	内容
五〇	美川村高学年研究会	五五	上浮穴郡（教科研）音楽研究会
五一	上浮穴郡（教科研）理科研究会	五六	愛媛県教育研究大会松山管内大会
五二	美川村ＰＴＡ指導者研究集会	五九	美川村教育研究会
五三	創立百周年記念式典（一〇月一〇日）		上浮穴郡給食研究会

三　表彰等

年度	内容
五三	児童貯金、四国郵政局長表彰

昭和六〇年以降、複式学級三学級となる見込みであるが、へき地小規模校の持つ弱点を克服し、積極的にその特性を生かし、社会性の育成に留意しつつ、一人一人が生きる魅力ある学校づくりを目指している。

七　仕七川中学校



仕七川中学校

美川村二十年誌に続き昭和五〇年度以後一〇年間の本校の歩みをまとめる。

科学技術の進歩、経済の発展は産業・就業の諸面に大きな変化をもたらし、山間地域の本校区でも人口の流出は大きく過疎化は急激に進み、その傾向は今も続いている。

開校当時三三六名であった生徒数は五〇年度一一五名・五九年度四九名となった。

生徒数は減少したが、水と緑の郷土を愛する気持ちに変わりはなく玄関前の樅の大木とともに生徒たちは、たくましく、そして明るく育っている。

一　施設・設備の充実状況

年度	内容	年度	内容
五〇	第二水源及び貯水槽・殺菌装置完成	五六	管理棟屋根全面ふき替え
	運動場に夜間照明設備完成（六基）	五七	体育館東側通路に屋根完成
五二	特別教棟北側に庭球コート完成		林間教室の机・腰掛取り替え改修完了
五四	校門から校内道路全面舗装（二〇〇メートル）	五九	音楽室・図書室・視聴覚室内装完成
五五	焼却炉一基上校舎北側に新設		

二　主要行事

年度	内容	年度	内容
五〇	上浮穴郡教科研理科研究会	五六	上浮穴郡教科研技術家庭科研究会
五一	愛媛県教育研究大会松山管内大会	五七	上浮穴郡教育研究大会
五二	上浮穴郡ＰＴＡ研究大会		美川村三中学研究グループ誌作成
五三	上浮穴郡教科研英語・保健体育研究会	五八	愛媛県へき地教育研究指定校となる
五四	美川村ＰＴＡ指導者研究集会	五九	愛媛県へき地教育研究大会
五五	上浮穴郡教科研特別活動研究会		

三　表彰等

年度	内容	年度	内容
五三	地域に根ざす学校教育優良校（県教委）	五七	優良青少年団体知事表彰（愛媛県知事）
五四	全日本よい歯の学校（日本歯科医師会）		全日本よい歯の学校表彰（日本歯科医師会）
五五	愛媛県青少年剣道大会優勝（剣道連盟）	五八	県中学総体剣道個人優勝＝滝下政雄
五六	全日本よい歯の学校表彰（日本歯科医師会）		

四　特記事項

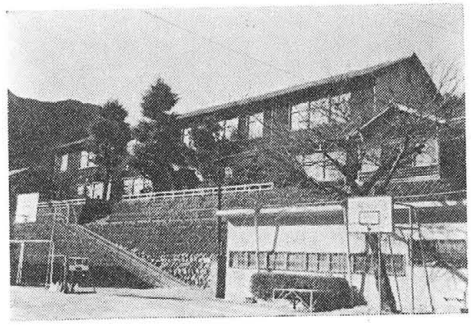
○秋季運動会に歴代校長来校

昭和五八年九月二三日、秋季運動会への招待にこたえていただき初代岡田虎太郎校長はじめ歴代の校長先生がたがそろって来校された。生徒はもとより地域のかたがたに喜ばれ新聞紙上にも大きく報道された。昼食後の一とき思い出多い校地を回られ話に花が咲いた。殊の外、玄関前の樅の木に触れての感無量のお姿が印象的であった。

○愛媛県へき地教育研究大会（中学校部会）開催

昭和五八年四月、愛媛県へき地教育研究校として二年継続の指定を受け五九年一一月研究発表大会をもった。〝生き生きとした生徒の育成を図る教育の実践的研究〟を主題に…素直な心で・感動ある体験を求めて…を心としての研究推進であった。美川村全校の御支援を得て大会は成功裏に終了した。この研究推進を通して生徒たちが、明るく素直に、そしてたくましく伸びてくれたことは何にも代え難い成果であった。今日も、明るい歌声が仕七川の空に流れる。

八　黒藤川中学校



黒藤川中学校

昭和五〇年代の大きな変化は二つある。その一つは、高度経済成長と科学技術の進歩とともに、都市への人口流出が甚だしく、過疎化が急激に進み、昭和三七年度一七九名いた生徒が、六〇年度にはわずかに二四名に激減している。

今一つは、昭和四二年一〇月以来の国鉄二箆バスが五九年七月三一日に廃止となり、二箆地区通学生達の足が奪われたことである。村理事者、教育委員会などの御高配により、二箆小学校区通学生教育基金をいただき、自転車を購入し、ＰＴＡのかたがたでトチザコに自転車置場を設け、雨にも負けず、風にも負けず元気に通学している。

一　施設・設備の充実状況

年度	内容	年度	内容
五〇	へき地教育集会所西及び校舎南壁面補修運動場砂場完成	五四	男子便所大改修（個人用となる）
五一	階上手洗所新設　校舎内照明設備改装　ＶＴＲを導入し、学習の近代化を図る。	五五	藤社地区は美川中央中学校区に変更　ビッグベンの新しいチャイムに変更
五二	前宿直室を改造し、放送室を新設　男子更衣室設置　教室のロッカー改良	五六	石油類等貯蔵庫新設
五三	運動場防球網完成	五七	職員室及び校長室入口改修
	国鉄二篦線黒小前バス待合所建設	五八	防球網張り替え。　北隅水路改修
		五九	焼却炉横の坂道沿いの水路改修

二　主要行事

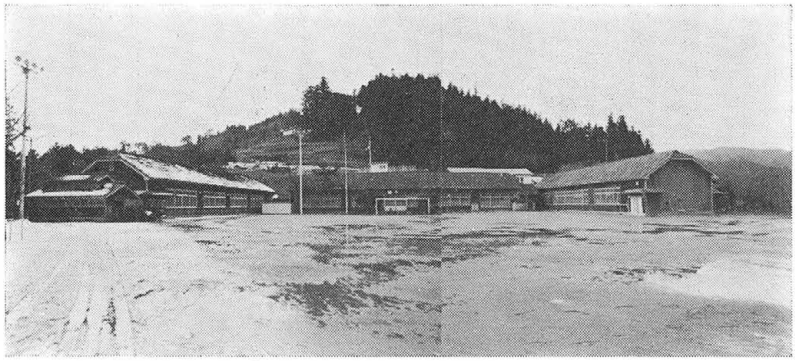
年度	内容	年度	内容
五〇	郡教科研究会（国語）		会（音楽・美術）
五二	上浮穴高等学校黒藤川父母の会を結成し、生徒の健全育成を図る。	五六	姉妹校砥部中学との交流学習実施　郡教科等研究会（特別活動）
五五	姉妹校砥部中学との交流学習実施　郡教科等研究	五八	郡教科等研究会（理科・特別活動）

三　表彰等

年度	内容	年度	内容
五三	永年にわたる気象観測業務に対し、大阪管区気象台長より感謝状	五五	郡新人大会　柔道団体優勝
	園芸クラブの環境美化に対し、郡コミュニテイ推進協議会より表彰	五六	郡青少年柔剣道大会　柔道団体優勝
五四	全日本よい歯の学校表彰（日本歯科医師会）	五七	郡新人大会　卓球女子団体優勝
			郡総合体育大会　卓球女子団体優勝

文頭にある校章は、昭和二三年に制定されたが、この由来は、黒藤川地域に自生する大ツヅラフジの花を図案化したもので、ツヅラのごとくしっかりと大地に根を張り、つきない根気力、青々と強靭に伸びる蔓（つる）は、個性の伸長を意味し、そのうえ誠実・親切でやさしい郷土の美風を象徴している。また、校訓「志をたて、気迫をもて、自らなせ」の三項目を表現しているとも考えられる。

黒藤川中学校生徒は、年々減少してはいるが、りっぱに伝統を守り抜かんと、朝に夕に「霊峰の明神山」「四国の山の白眉たり」「清らの流れとこしえに」「先人の業伝えん我等」「真理の道を励まん我等」と校歌を歌い続けて、建学の精神を継承し、校訓の実践化を目指して、校舎入口のヒマラヤ杉のごとく、たくましく成長している。



美川中央中学校

九　美川中央中学校

（校　訓）

創　造　　節度をまもる
自　主　　礼儀をただす
協　力　　節約につとめる

（生活目標）

〝伝統を尊重するとともに伝統を創造し、人間性豊かで実践力のある生徒を育てる〟ことを基本として、次のような生徒像を描く、師弟同行の学び舎である。

㈠自己の目標を定め努力する生徒
㈡何事にも力いっぱいやりぬく生徒
㈢体位・体力に応じて運動する生徒
㈣相手の立場が理解できる生徒
㈤人や物に感謝を忘れない生徒

あるべき姿を求めて努力している。

一　施設・設備の充実状況

年度	内容
五一	九・一　防犯警報機・火災報知機・耐火金庫設置により学校の無人化開始
五二	台風により第二運動場崩壊、翌年五月に大改修
五五	四・一　簡易上水道完成通水を開始
五六	八・二一　美川中央中学校水泳プール起工式
	五・　調理室水道・ガス工事調理台払下
	七・二三　体育館便所の通路を大改修
五六	九・八　運動場の夜間照明設備完成
五七	四・二六　運動場周囲の防球ネット完了
	八・二〇　第一ストックハウス設置
五八	八・一三　体育館外装吹付塗装完了
	九・二　自転車置場を入口に建設
五九	三・　第二ストックハウス校舎裏設置
	八・二二　運動場拡張・道路変更工事始
	一〇・四　体育館の用具室雨漏り修理

二　主要行事

年度	内容
五〇	一〇・一九　郡教科等研究会（特　活）
五一	一〇・一九　郡教科等研究会（音　楽）
五二	一〇・三　郡教科等研究会（理・社）
五三	一〇・一七　郡教科等研究会（国・数）
五五	六・二四　郡教科等研究会（技・家）
五六	七・一　プール竣工式、プール開き
	七・一三　郡教科等研究会（音・美）
	一一・六　郡校長会・教育長会合同訪問

五七	六・二四	郡教科等研究会（特　活）
五九	六・一五	県同和課の同和教育指導訪問
五九	一〇・一六	郡教科等研究会（道・数）

三　表彰等

年度	内　容
五三	六・一二　女子庭球部五年連続優勝により郡教連・郡学体から表彰を受ける。
五六	五・一〇　全国木材加工「作文」、篠崎敏幸最優秀で農林大臣賞受賞
五八	一〇・二六　県優良ＰＴＡとして県教育長・県Ｐ会長から表彰を受ける。
五八	一二・二七　交通安全推進で模範として久万警察署長から感謝状受領
五九	六・一二　交通事故防止活動推進で模範として郡交通安全推進協議会と久万警察署から感謝状受領

四　その他特記事項

年度	内　容
五四	三・七　山口勝美教頭病気療養中二月二七日逝去、学校葬を実施

仕七川小学校

年度	歴代校長氏名	職員数	学級数	児童・生徒数 男	女	計
五〇	向井　一三	八	六	五七	四六	一〇三
五一	〃	八	六	四九	四一	九〇
五二	中矢　喬	九	六	四七	三七	八四
五三	〃	八	六	四六	三二	七八
五四	〃	一〇	六	四七	三三	八〇
五五	玉井　洋三	一〇	六	四三	三三	七六
五六	〃	九	六	三五	二九	六四
五七	〃	八	五	二八	二九	五七
五八	玉井　時廣	八	五	二四	三四	五八
五九	〃	八	五	二一	三二	五三

東川小学校

年度	歴代校長氏名	職員数	学級数	児童・生徒数 男	女	計
五〇	川崎　清規	五	四	一九	二四	四三
五一	野上　長重	五	四	一七	二二	三九

黒藤川小学校

年度	歴代校長氏名	職員数	学級数	児童・生徒数 男	女	計
五〇	竹田　清一	九	六	三九	四九	八八
五一	宮下　綱夫	一〇	六	三五	四四	七九
五二	〃	九	六	二八	三六	六四
五三	〃	七	五	一七	三五	五二
五四	高野　忠夫	七	五	一九	三二	五一
五五	〃	七	五	一六	二四	四〇
五六	〃	六	四	一四	二一	三五
五二	〃	五	四	一四	二一	三五
五三	菅　茂晴	五	四	一四	一四	二八
五四	〃	五	四	一二	一八	三〇
五五	〃	五	四	一二	一七	二九
五六	八石　武雄	五	四	一二	一六	二八
五七	〃	四	三	九	一三	二二
五八	新居田　久	四	三	七	一二	一九
五九	〃	四	三	四	一一	一五

二箆小学校

年度	歴代校長氏名	職員数	学級数	児童・生徒数 男	女	計
五七	米子　安男	六	四	一一	一九	三〇
五八	〃	六	四	一二	一五	二七
五九	〃	五	三	一二	一一	二三
五〇	田本　芳夫	五	四	一六	一四	三〇
五一	〃	五	四	一三	一五	二八
五二	〃	四	三	一〇	一四	二四
五三	石崎　蕊	四	三	八	一一	一九
五四	〃	四	三	六	一二	一八
五五	〃	四	三	三	一一	一四
五六	武智　修	四	三	二	七	九
五七	〃	三	二	一	六	七
五八	〃	三	二	〇	四	四
五九	米子　安男	三	二	〇	三	三

美川西小学校

年度	歴代校長氏名	職員数	学級数	児童・生徒数 男	女	計
五〇	影浦　敏博	一一	六	六一	五三	一一四
五一	〃	一一	六	五五	五一	一〇六
五二	〃	一一	六	四九	四六	九五
五三	武智　繁雄	一一	六	三九	四一	八〇
五四	〃	一一	六	四二	四〇	八二
五五	〃	一一	六	三三	三一	六四
五六	新山　賢	一一	六	二八	三二	六〇
五七	〃	一〇	五	二七	二七	五四
五八	〃	九	五	二七	二六	五三
五九	水田　敏廣	八	四	二四	二〇	四四

美川南小学校

年度	歴代校長氏名	職員数	学級数	児童・生徒数 男	女	計
五〇	土居　通昌	九	六	四七	四七	九四
五一	〃	八	六	三七	四一	七八

仕七川中学校

年度	歴代校長氏名	職員数	学級数	児童・生徒数 男	女	計
五〇	福島　直行	九	四	五七	五八	一一五
五一	〃	九	四	五八	六〇	一一八
五二	毛利　輝虎	八	三	五一	四八	九九
五三	〃	八	三	四六	四六	九二
五四	〃	八	三	三四	二七	六一
五五	〃	八	三	二七	二六	五三
五六	福良俊太郎	九	三	二九	二一	五〇
五七	〃	八	三	二七	二六	五三
五八	〃	八	三	二六	二一	五〇
五九	〃	八	三	二四	二〇	四九

黒藤川中学校

年度	歴代校長氏名	職員数	学級数	児童・生徒数 男	女	計
五二	上岡　哲男	八	六	三九	四〇	七〇
五三	〃	八	六	三四	二六	六〇
五四	〃	七	六	三一	二四	五五
五五	近藤　良悟	六	六	二一	二五	四六
五六	〃	七	五	二二	二三	四六
五七	〃	七	五	二二	二四	四六
五八	高橋　脩	六	四	一五	二一	三六
五九	〃	六	四	一三	一五	二八
五〇	二神　敏雄	七	三	四三	二九	七二
五一	石丸　法明	七	三	四一	二五	六六
五二	〃	八	三	三五	三六	七一
五三	〃	八	三	三九	三四	七三
五四	〃	八	三	二七	三二	五九
五五	永井　一男	八	三	二五	二八	五三
五六	〃	八	三	一六	二六	四二
五七	〃	八	三	一八	二四	四二
五八	青井　勇	七	三	一二	一七	二九
五九	〃	七	三	一〇	一八	二八

年度	歴代校長氏名	職員数	学級数	児童・生徒数 男	女	計
五〇	依岡誠	一一	四	六六	六六	一三二
五一	〃	一〇	三	五九	六一	一二〇
五二	木村孟	一〇	三	六〇	六一	一二一
五三	〃	一〇	三	五五	五九	一一四
五四	〃	一〇	三	四四	五二	九六
五五	〃	一〇	三	五一	三九	九〇
五六	田本芳夫	一〇	三	四六	三三	七九
五七	〃	一〇	三	四六	三一	七七
五八	〃	一〇	三	三二	二九	六一
五九	〃	一〇	三	二五	三三	五八

仕七川中学校進路一覧

年度	卒業生徒	進学			就職			家事従事			各種学校			定時制		
		男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
四九	五五	一二	二五	三七	九	七	一六	○	○	○	二	○	二	四	三	七
五〇	三五	一二	一三	二五	四	六	一〇	○	○	○	○	○	○	四	五	九
五一	四七	一七	一七	三四	八	五	一三	○	○	○	○	○	○	三	三	六
五二	三四	一二	一〇	二二	五	七	一二	○	○	○	○	○	○	一	○	一
五三	三五	一三	一七	三〇	二	一	三	○	○	○	一	二	三	一	○	一
五四	二六	一六	九	二五	一	○	一	○	○	○	○	○	○	○	○	○
五五	二五	一二	一一	二三	一	○	一	○	○	○	○	○	○	一	○	一
五六	七	五	一	六	一	○	一	○	○	○	○	○	○	○	○	○
五七	一八	九	七	一六	一	一	二	○	○	○	○	○	○	一	一	二
五八	二四	一三	九	二二	○	二	二	○	○	○	○	○	○	○	一	一

年度	卒業生徒	進学			就職			家事従事			各種学校			定時制		
		男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
四九	二三	六	三	九	五	八	一三	○	○	○	一	○	一	一	七	八
五〇	二八	一二	八	二〇	四	四	八	○	○	○	一	○	一	一	四	五
五一	二四	一三	五	一八	三	三	六	○	○	○	二	○	二	一	○	一
五二	一九	七	八	一五	三	一	四	○	○	○	○	○	○	○	一	一
五三	二三	一一	五	一六	四	三	七	○	○	○	○	○	○	○	○	○
五四	二八	一〇	一六	二六	一	一	二	○	○	○	○	○	○	○	○	○
五五	二二	一一	五	一六	二	二	四	○	一	一	○	○	○	○	二	二
五六	一一	四	五	九	○	二	二	○	○	○	○	○	○	○	二	二
五七	二二	五	一〇	一五	三	三	六	○	○	○	○	○	○	○	二	二
五八	一〇	三	四	七	一	二	三	○	○	○	○	○	○	○	○	○

美川中央中学校進路一覧

年度	卒業生徒	進学			就職			家事従事			各種学校			定時制		
		男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
四九	四二	一二	二〇	三二	七	三	一〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	三	〇	三
五〇	五一	二一	一八	三九	九	三	一二	〇	〇	〇	〇	〇	〇	二	〇	二
五一	四二	一六	二〇	三六	一	五	六	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
五二	三九	一八	一七	三五	一	一	二	〇	〇	〇	〇	〇	〇	二	〇	二
五三	四〇	一九	一七	三六	三	一	四	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
五四	四二	一六	二三	三九	〇	三	三	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
五五	三三	一四	一六	三〇	三	〇	三	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
五六	二一	七	一〇	一七	二	二	四	〇	〇	〇	〇	〇	〇	一	二	三
五七	三七	二四	一一	三五	一	一	二	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
五八	二三	一一	一〇	二一	一	〇	一	〇	〇	〇	一	〇	一	〇	〇	〇

第三章　社会教育

昭和五〇年代の社会教育の根幹をなすものは、「物」から「心」への転換であると言えよう。

すなわち、三〇年代後半から四〇年代中期にかけて、全国的に高度経済成長に沸き、「消費は、美徳なり」の流行語が生まれ、世は正に使い捨ての時代であったが、四八年のオイル・ショックにより、物資の不足というパニック状態を経験した。そうして、あらゆる物価が高騰し、やがて経済は、0（ゼロ）成長あるいは低成長期を迎えた。

そのような世の移り変わりの中で、人々は高度経済成長下の物の豊かさの中で見失ってきた「心」を取り戻すべく、それを教育に求められ特に社会教育にその課題が大きく課せられた。

その具体策として、生涯教育、生涯学習の重要性が大きく叫ばれた。

本村においても、村づくりは人づくりにあるとして、人口の減少・過疎化・高齢化の中で、社会教育の総合拠点である公民館をはじめ、各種社会教育団体の育成、活性化に努めてきた。

第一節　公民館活動

中央公民館と村内六小学校区単位の地域公民館により地道な活動が続けられている。

盆踊り大会・敬老行事・運動会やバレーボール・ソフトボール・卓球などのスポーツ活動が活動の中心となっているが、公民館によってそれぞれ特色ある活動がなされており、盆栽教室や書道教室のほかに、最近ではカラオケ大会なども開かれるようになり、住民の連帯意識の高揚と地域の活力を高める意欲の盛り上げに役立っている。

美川村公民館長

氏名	期間
木下久敬	四八、一〇、一～五〇、四、六
新谷養一郎	五〇、六、二三～現在

社会教育主事

氏名	期間
坂田清	四九、四、一～五三、三、三一
田中盛重	五三、四、一～五八、三、三一
高橋裕	五九、四、一～現在

美川村公民館主事

氏名	期間
土居勝竹	四九、四、一～五四、三、三一
田野典孝	五四、四、一～五八、三、三一
猪上定幸	五八、四、一～現在

館名	館長 年度	館長 氏名	主事 年度	主事 氏名
仕七川	四九～五〇	水元　勇	四九～五〇	高橋　裕
	五一～	大野　清一	五一～五二	猪上　定幸
			五三～五四	大西　和孝
			五五～五六	清水　幸男
			五七～五八	高橋　房俊
			五九～	金子　幸重
東川	四九～五〇	木山　徳重	四九～五〇	井上　義秋
	五一～五二	井上　義秋	五一～五二	中川　良夫
	五三～五四	木山　徳重	五三～五六	佐藤　昌保
	五五～五七	谷原　一郎	五七～五八	押岡栄太郎
	五八～五九	福原　市義	五九～	中川　良夫
	六〇～	西田　孝一		
美川西	四七～四八	伊藤　忠興	四八～五〇	天野　秋一
	四九～五一	一ノ宮照昌		

館名	館長 年度	館長 氏名	主事 年度	主事 氏名
美川西	五二～五三	西谷　利夫	五一～五二	栗下　宗孝
	五四～五五	山下　喬	五三～五四	西森　福夫
	五六～五七	竹口　渉	五五～五六	大南　嘉徳
	五八	片岡　傳	五七～五八	栗下　正
	五八～五九	水本　一美	五九～	松浦　鹿雄
	六〇～	丹波　松清		
美川南	四八～五〇	坪内　要	四九～五〇	城山　照文
	五一～五二	土居　寛	五一～五二	山村　利一
	五三～五四	川崎　清隆	五三～五四	和泉　吉信
	五五～五六	高岡　一明	五五～五六	土居　勝竹
	五七～五八	川崎　清隆	五七～五八	成川　勇夫
	五九～	猪野　善晴	五九～	遠山　豊
黒藤川	四七～五六	田野　正弐	四七～五〇	高山　稔明
	五七～五八	土居　敏雄	五一～五四	玉井　春鬼

館名	館長		主事		館名	館長		主事	
	年度	氏名	年度	氏名		年度	氏名	年度	氏名
黒藤川	五九～	玉井　春鬼	五五～五八 五九～	菅　民重 田野　典孝	二篦	五五～五八 五九～	土岐　博隆 小野　優	五三～五四 五五～五八 五九～	中居　留吉 小野　優 小倉　一夫
二篦	四九～五二 五三～五四	久保千代三郎 西本　集	四七～五〇 五一～五二	栄代良比古 新宅　隆盛					

一　生活改善運動

公民館活動の一環として推進されていた「生活合理化運動」は、時代の推移を経て、「生活改善運動」と変わっていった。これも「物から心へ」の転換と言えよう。

日常生活の中から無理・無駄をなくし、相手に物を贈ることよりまごころを伝えようとの発想であらゆる運動が展開された。

冠婚葬祭の簡素化の一環として、香典返しやお見舞い返しの廃止、花輪・弔旗の廃止を呼び掛け、祝儀・不祝儀のポチ袋を共同印刷し、公民館を通じて各戸に有償配布し、生活改善運動の趣旨を啓もうした。

二　夏季大学

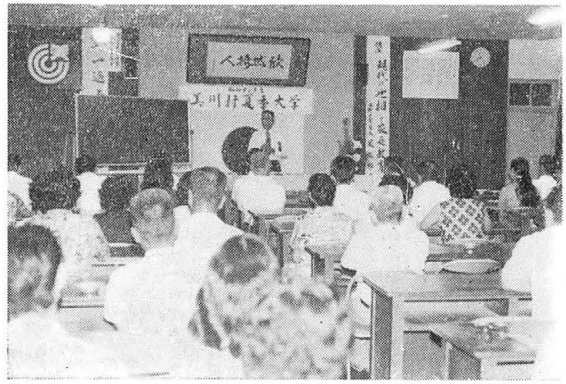
昭和四七年から始められた夏季大学は、その後も成人教育や生涯教育が盛んに叫ばれる中で、毎年七・八月に三夜、中央集会所を会場に開講された。

講師団は、主に松山市近郊から招き、時事問題をはじめ健康問題、教育、産業、歴史上の人物像等々、幅広いジャンルからその時期に即応した講演を開き学習した。

五六・五七年には、農村環境改善センター建設工事に伴い、中央集会所が取り壊されたため、旧村単位の三会場に分かれて開講した。

五八年は、改善センターの新築落成記念事業の一環として、県教育委員会や愛媛新聞社との共催で、愛媛夏季大学を同センター大ホールで開催した。放送タレントの三国一朗を招いて、「職業としてのタレント」と題する講演を三〇〇人が聴講したが、講演内容が少々期待はずれであったとの感想が多く聞かれた。

五九年には、従来の一会場で三夜方式で開講し、一回平均九〇人が受講して六〇人が皆勤した。



夏季大学

三　高齢者大学

「高度先端技術、情報化時代」をどう生き抜くか、社会の変化に伴い、今日では生涯を通じて学習しなければならない時代となった。

昭和四七年から「老人大学」が開設され、五四年から「高齢者大学」に名を改めて年に三回開催されているこの大学には、毎回一〇〇名を超える受講者があり、年間の三回ともに受講した者には皆勤賞として賞状と粗品が贈られている。

老後の健康は心と体と頭のバランスが必要で、そのためにも高齢者大学に参加して、明るく楽しい毎日を送ろうと受講生は意欲おう盛である。

高齢者大学

四　同和教育

江戸幕府が身分制度の中で政治的に作った被差別部落にかかる同和問題は、解決されぬまま存続していたが、昭和四〇年の同和対策審議会の答申により、問題の早急な解決は国の責務であり、国民的課題であるとされ、四四年同和対策事業特別措置法が制定され、引き続き五七年に地域改善特別措置法が制定され、差別解消へのあらゆる施策が講じられた。

同和地区を持たない美川村においても、この問題を国民的課題としてとらえ、四九年に美川村同和教育協議会が発足し、差別解消への学習と啓もう活動が学校教育・社会教育の場で続けられている。

第二節　幼児教育

昭和三一年度に幼児学級としてスタートした本村の幼児教育は、その後週一回から二回へ、隔日から全日保育へと急速な高まりを見せたが、五〇年代に入り、幼児の減少により、四・五歳児の混合保育の園も増え、二箇保育園では、五五・五六年度は、園児〇（ゼロ）となり休園していたが、五七年度に一名の入園があり再開された。

園児数の減少による小規模園の短所を補うため、五五年度から村内の全園の交流保育を年一回開催するほか、三ブロックに分けての交流保育も行った。五九年度は、夏・秋の二回全園合同の交流保育を行った。

また、五五年度から松山見学遠足も年少・年長いっしょに実施している。

美川西保育園は、県教育委員会の指導もあり、五六年度から美川西幼稚園となったが、他の保育園においても幼稚園の教育課程と同様の保育がなされている。

なお、幼稚園・保育園の園長は、引き続いてそれぞれの小学校長に委嘱して、学校教育のかたわら、幼児教育にもその専門的知識と豊富な経験を生かして、保母や園児の指導に当たっていただいている。

施設整備については、四九年度から黒藤川、五〇年度から美川西及び美川南、五三年度から仕七川にそれぞれ独立園舎が整備され、恵まれた環境で保育がなされている。

仕七川保育園

年度	園長氏名
四九～五一	向井一三
五二～五四	中矢喬
五五～五七	玉井洋三
五八～五九	玉井時廣
五一～五二	野上長重
五三～五五	菅茂晴
五六～五七	八石武雄
五八～五九	新居田久

東川保育園

年度	園長氏名
四八～五〇	川崎清規

美川西幼稚園

年度	園長氏名
五〇～五二	影浦敏博
五三～五五	武智繁雄
五六～五八	新山賢
五九～	水田敏廣

美川南保育園

年度	園長氏名
四九～五一	土居通昌
五二～五四	上岡哲男
五五～五七	近藤良悟
五八～五九	高橋脩
五〇～五三	宮下綱夫
五四～五六	高野忠夫
五七～	米子安男

黒藤川保育園

年度	園長氏名
四八～五〇	竹田清一
四九～五二	田本芳夫
五三～五四	石崎蕊
五五～五六	休園
五七～五八	武智修
五九～	米子安男

二箇保育園

園児数の推移

年度	仕川七保育園	東川保育園	美川西幼稚園	美川南保育園	黒藤川保育園	二箇保育園	計
五〇	二九	二九	一三	一六	一二	七	一〇六
五一	二六	二三	一六	一二	一一	五	九三
五二	二六	二三	一五	一四	一〇	四	九二
五三	二二	一九	一一	一四	七	四	七七
五四	二〇	一五	一四	九	六	一	六五

年度	仕川七保育園	東川保育園	美川西幼稚園	美川南保育園	黒藤川保育園	二箇保育園	計
五五	一九	一五	一三	六	七	〇	六〇
五六	二〇	一四	九	七	六	〇	五六
五七	二〇	一一	六	六	四	一	四八
五八	一六	八	六	五	二	一	三八
五九	一三	一二	八	五	二	四	四四

一　仕七川保育園

一　施設・設備の充実状況

年度	内容	年度	内容
五一	遊戯室のカーペット工事	五四	ピアノ購入
五三	園舎新築	五九	砂場拡張及び砂の入替え
	カラーテレビ購入		ストーブ二台購入

二　主要行事

年度	内容	年度	内容
五三	村内幼児教育研究会	五七	上浮穴郡教育研究大会（幼・保の部）
五四	村内交流保育	五八	村内幼児教育研究会
	郡幼連夏季研究会		

二　東川保育園

一　施設・設備の充実状況

年度	内容
五一	保育室・床の張り替え
五四	廊下の床新設〈土間〉
五六	保育室壁面補修

二　主要行事

年度	内容
五一	村内幼児教育研究会
五六	村内幼児教育研究会
五七	東川・仕七川合同保育
五八	東川・仕七川合同保育
五九	仕七川保育園へ移動保育（二学期から週一回）

三　美川西幼稚園

一　施設・設備の充実状況

年度	内容
五〇	美川西へき地保育所新築落成 以来内部設備等年々計画的に充実
五九	ホール床張替え、カーテン取替え

二　主要行事

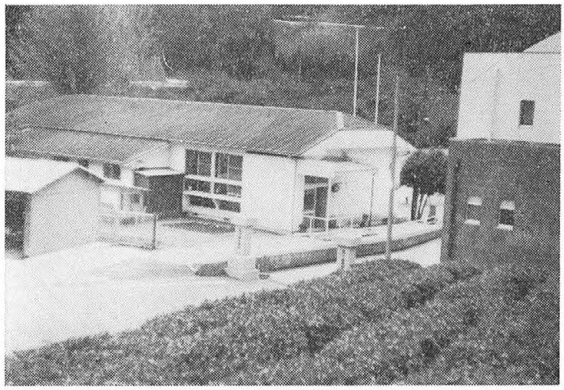
年度	内容
催	美川村内保育研究会・美川村内交流保育を毎年開

年度	内容
五九	郡幼連夏季研究大会

三　特記事項

○幼稚園誕生

昭和五六年度から、美川西へき地保育所が美川西幼稚園として発足、名実ともに幼児教育の中心として、その機能をじゅうぶんに発揮し現在に至っている。



美川西幼稚園

四　美川南保育園

一　施設・設備の充実状況

年度	内容
五一	ピアノ購入
五三	園児用腰掛購入
五五	スチールハウス〈物置〉購入
五六	保育園・給食室間渡り廊下工事

二　主要行事

年度	内容
五一	村内幼児教育研究会
五五	村内幼児教育研究会
五六	園児数一〇名以下のため四・五歳児混合保育になる。

五　黒藤川保育園

一　施設・設備の充実状況

年度	内容
五九	カーテン取り替え

二　主要行事

年度	内容
五〇	交通安全教室実施
	潮干狩（壬生川）
五一	二篦保育園との交流会
五二	海水浴（梅津寺）
五三	海水浴（梅津寺）
	親子遠足

五五	保母一名となる
五六	交通安全教室
	親子みかん狩り
五七	親子ふれあい教室
	二篦保育園から週一日来園保育
五八	二篦保育園から週一日来園保育
	お別れ遠足〈小学校と合同で〉
五九	村内幼児教育研究会
	二篦保育園と隔週交替で移動保育〈二学期から〉

六　二篦保育園

一　施設・設備の充実状況

年度	内容
五〇	保育室の照明増設
	遊戯室と音楽室の間のアコーディオンカーテン設置
五七	保育室へ親子電話増設
	園児用のトイレに改造

二　主要行事

年度	内容
五〇	黒藤川保育園と交歓会（堂ケ森）
五三	村内幼児教育研究会

五五	在籍園児なく休園	
五六		黒藤川保育園へ移動保育（週一回）
五七	入園児一名再開する	

第三節　青年教育

過疎化の進む中で、特に青年層の減少は、農山漁村においては、どこも深刻な悩みである。

本村の青年団活動は、昭和五〇年代に入り、団員数は減ったものの分団の活動は活発に行われた。月一回の定例会によりキャンプ・奉仕作業・レクリエーション大会など分団独自の活動が進められた。また地域ごとの盆踊り大会や公民館の運動会などに参加、協力という形が定着し始めた。そんな中で分団交流会を年度当初にもち、同じ美川の青年団員としての意識の統一を図っている。

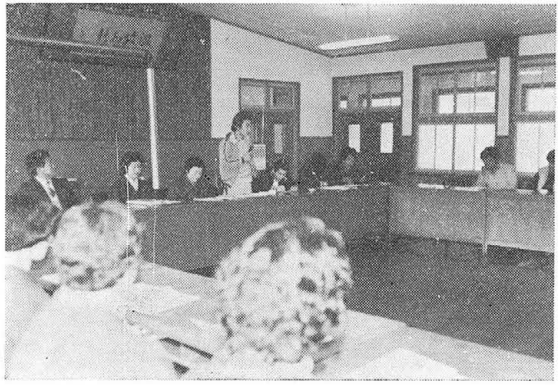
昭和五七年青年団は、上浮穴郡スポーツ大会においてソフトボールで優勝し、念願の県大会出場を果たした。

また、五九年夏、地域公民館ごとの盆踊りとは別に、中央において第一回美川村納涼盆踊り大会が、青年団主催で行われた。当日は、村主催のみかわ川まつりとして、花火も打ち上げられ、婦人会の応援で踊りの輪もにぎやかに盛大な大会となった。

五六年から、婦人と青年の交流会が開催されており、婦人会、青年団の役割や互いの立場から見た「美川村の将来像」等幅広い分野にわたり話し合われている。

美川村青年団長

年度	氏名
五〇	成川勇夫
五一	岡林烈人
五二	成川勇夫
五三	金子幸重
五四	安宅鉄夫
五五	遠山豊
五六	中平晴憲
五七	古見宗敏
五八	安宅福義
五九	伊藤高行



青年と婦人の交流会

現在、青年団は、四分団六〇名である。また、従来から小学校区ごとに開設されていた青年学級は、青年の減少に伴い、東川・黒藤川地区では、開設できない年が続いたが、五九年には、六学級がそろって開設された。

第四節　婦人教育

近年、美川村内にも従来からの土木建設作業のほかに縫製工場や久万

美川村婦人会長

年度	会長氏名
五〇	小倉恵美子
五一	渡辺ユキ子
五二	山本田鶴子
五三～五五	武田嬉美子
五六～	大原五月

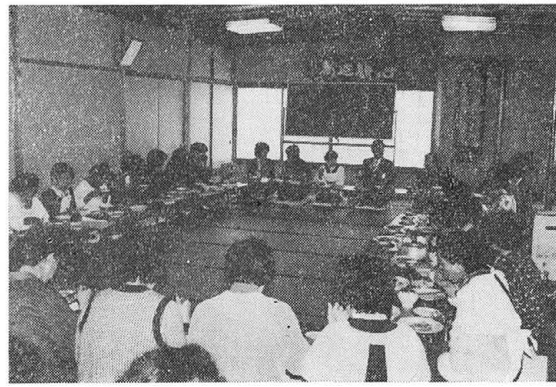
町の電気工場などの働く場の増加に伴い婦人の就労形態が大きく様変わりしたことなどにより、一時六〇〇人を超えていた美川村婦人会の会員は、五〇年代に入り半減し、各小学校区ごとに支部を組織していたが四九年から東川支部が地域内での活動にとどまり、五支部となり会員の減少に更に拍車をかけ、五九年から二箆支部も同様な状態となり、現在、全村で一六〇人と一〇年間で四分の一に激減した。このような現象は、本村だけでなく、全県・全国的な問題でもあり、地域婦人会の重要性、活性化が強く叫ばれている。

そのような状況の中で、五八年には、婦人会OBも含めて、「高齢化社会に対応して、熟年婦人のあり方を考えよう」と、年間を通して熟年学級を開設した。

また、婦人会のほかに、小学校区単位に婦人学級も開設して、婦人として、母として、女としての生き方を学ぶために、多種多様な学習を根気強く継続している。

一　生活学校

村婦人会の中心的な活動として、毎年四、五回開設され、一部の地域で行っていたものを中央一か所に統合して開催されている。毎年カリキュラムに工夫をこらし、調理実習・ミニバレー・清掃活動・正月用ミニ盆栽・健康問題等々、毎回三〇～四〇人の受講生で継続的に開講されている。



調理実習後試食する生活学校の受講生

二　ふれあい結婚式（会費制）

都会でのブライダル産業の盛況により、年々結婚式の派手さが問題になる中で、本村においても過去に公民館結婚式が実施された例もあったが、いつのころか停止されたままになっていた。その後、五七年農村環境改善センターの建設により、結婚式場・設備が整備され、センターで結婚式を行うようになったが、そのような中で婦人会を中心に会費制結婚式が提唱され、先進町村の事例に学んで検討を加え制度化して、五九年一〇月と一一月に会費制結婚式の第一号、第二号が相次いで挙行された。

婦人会を中心に青年団・ＶＹＳの協力を得て、実行委員会を組織し運営され、「ふれあい結婚式」と名付けられた。

現段階では、会費制と従来の結婚式の二本立てで行われているが、徐々に一本化が実現されるべきである。

第五節　ＰＴＡ

児童・生徒が減少する中で、同様にＰＴＡ会員も減少したが、逆にＰＴＡの果たす役割、課題は大きく増大し

美川村PTA連合会長

年度	氏名
49	団上幸吉
50〜54	堀尾忍
55〜56	藤本幸三郎
57	石元勲
58	土居修
59	猪野善晴

単位PTA会長

仕七川中学校

年度	氏名
50	篠原擴
51〜53	高岡稔
54〜56	藤本幸三郎
57〜58	沖中寿夫
59	吉中光春

美川中央中学校

年度	氏名
50〜51	光田有
52〜53	一ノ宮照昌
54〜55	山村治夫
56〜57	石元勲
58	中山邦夫
59	猪野善晴

黒藤川中学校

年度	氏名
48〜54	堀尾忍
55〜56	玉井春鬼
57〜59	阿川正光

仕七川小学校

年度	氏名
45〜50	団上健
51〜54	坂口鶴男
55	片岡邦吉
56	猪上一男
57	吉中光春
58〜59	松下日出夫

東川小学校

年度	氏名
48〜50	福原市義
51〜52	谷原一郎
53〜55	西田孝一
56〜57	中久保登
58〜59	岡林博文

美川西小学校

年度	氏名
50〜51	大野和男
52〜53	丹波松清
54〜55	石元勲
56〜57	栗下宗孝
58〜59	田中盛重

（教育振興会）

美川南小学校

年度	氏名
49〜50	中平瞭
51〜52	田本豊弘
53〜54	猪野善晴
55〜56	伊藤博文
57〜58	土居修
59〜	山村利一

黒藤川小学校

年度	氏名
50〜55	畝繁雄
56〜59	釣井徳雄

二篦小学校

年度	氏名
50〜51	中居強
52〜53	西本悟
54〜55	二宮富好
56〜57	栄代良比古
58〜59	大野国男

た。都会の学校では、校内暴力・家庭内暴力・非行の低年齢化と青少年を取り巻く諸問題が激化する中で、美川村では、目に見えた非行はほとんど発生しなかったが、非行の芽を事前に摘み取り、健全な育成を図るべく「我が子、人の子、隔てなく」の精神で「愛の一声運動」をはじめとする運動を展開した。

親と教師の学習集団として、毎年七月に村ＰＴＡ研究大会を開催し、会員の研修を積み重ねている。ほかにも郡ＰＴＡ研究大会・地区別大会・県大会も毎年行われており、各単位ＰＴＡから数名ずつ参加して学習し、青少年の健全育成を目指して、学校教育及び教育施設の整備に後援団体として、地味ではあるが着実な活動を行っている。

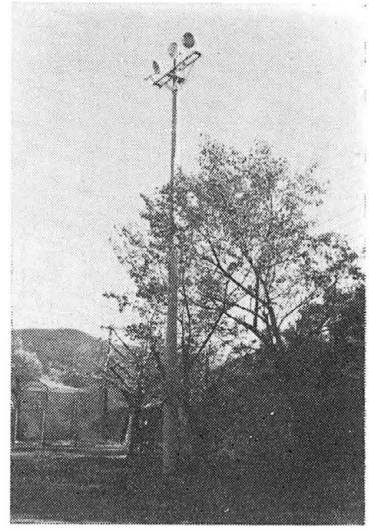
第六節　社会体育

一　夜間照明施設

昭和五〇年八月、久しく村民の待望であった夜間照明施設が、仕七川中学校運動場（約五七〇〇平方メートル）に完成した。

この施設は、工費四〇〇万円で、六基の柱、三六の水銀灯（三六キロワット）の投光器が備え付けられ、実測平均照度一二〇ルックスで郡内最高の明るさを誇った。

また、五八年八月には、美川中央中学校にも、工費六三九万円で、五基の柱、二〇の投光器（一キロワットメタルハライドランプ）が完成し、ソフトボールクラブ五チーム、野球クラブ七チーム、サッカークラブ一チームが相次いで結成されるなど、広く社会体育の振興と、村民の体力向上に寄与している。



夜間照明施設（中央中学校）

二　県民体育祭への出場

上浮穴郡社会人総合体育大会で、優勝又は準優勝をして初めて県民体育祭への出場権が獲得でき、県民体育祭（県大会）への壁は厚いものがある。

三　各種スポーツ大会の開催

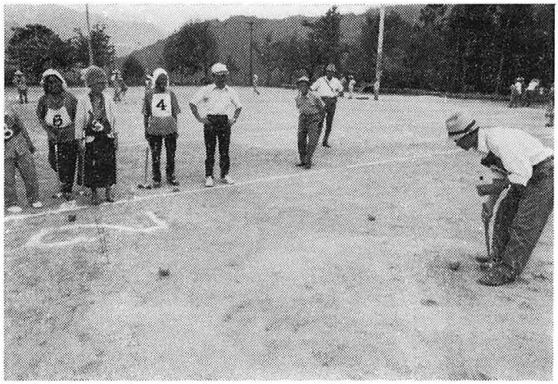
バレーボールリーグ大会　昭和五〇年に仕七川にバレー

郡社会人総合体育大会の成績（◎優勝　○準優勝）

種目 / 年度	バレーボール 男子	バレーボール 女子	卓球 男子	卓球 女子	ソフトボール
50	○	◎（仕七川）			
54			○	○	
55	○	◎（美川西）		○	
56		◎（仕七川）	○		
59					○

ボールクラブが結成されるなど、バレーボール熱が高まりを見せる中で、年一回の公民館主催バレーボール大会だけでは物足りない、まただれでもが参加できる大会をと、体育指導委員が優勝杯を寄贈して、五〇年五月からバレーボールリーグ大会が開催されている。

このリーグ大会は、春秋の年二回ですべて夜間に行われており、第一回大会の出場チームは七チームで、五七年の一五回大会では男子一〇チーム、女子六チームの参加数を数えているが、近年やや低調ぎみである。



クロッケー大会

少年スキークラブの講習会

公民館ソフトボール大会

一〇月一〇日の体育の日記念行事として、五四年から、公民館主催でソフトボール大会が毎年開催されている。

この大会は、日ごろスポーツに恵まれない人々が一人でも多く参加し、スポーツのダイゴ味を満喫してもらい、公民館下住民の親睦と体力づくりを目的とし、チーム作りにおいても、ピッチャーは村内

年度	氏名	年度	氏名
四七～五四	渡部　守	五三～五六	大堀　辰雄
四八～五〇	清水　幸男	五三～五六	石田　進
四九～五二	土居　幹雄	五五～	安宅　公広
四九～五二	松田　一幸	五七～	中田　龍明
四九～五二	梶家　修	五七～	下方　公士
四九～五二	佐藤　昌保	五七～	岡田　繁行
四九～五六	平柳　章一	五七～	土居　昭平
五一～五八	中家　好喜	五九～	村上　菊三
五三～五八	小倉　一夫	五九～	伊藤　高行
五三～五六	城山　照文		

職域大会などで投げている選手にはそれ以外のポジションを、チーム編成も二〇歳代三名、三〇歳代三名、四〇歳以上三名と年齢を制限し、だれでも参加できる大会運営にしており、村内各種スポーツ大会の中でも最多参加者の四〇〇名以上を数えている。

バドミントン大会　だれでもが手軽にできるバドミントンを広く普及させ、家族ぐるみのスポーツ化を目指して、五五年四月から毎年開催している。

第一回大会は、四七名の参加者で、五九年の第五回大会では二二名となり、目標に反して参加者の固定化と減少が見られている。

クロッケー大会　五五年ころから村内各単位老人クラブにおいてクロッケーが盛んに行われるようになり、五七年八月に第一回クロッケー大会が開催された。

この大会には、村老連会長の団上貢から優勝トロフィー、準優勝盾が寄贈され、毎年これを獲得すべく各地域で季節を問わず練習がなされている。

五九年の第三回郡大会では、仕七川チームが準優勝を獲得した。

四　少年スキークラブの結成

四三年に美川スキークラブが誕生しているが、四国一を誇る美川スキー場を持ちながら、将来を担う有望な選手がいないことなどから、将来の国体選手を養成しようと、村内小中学生を対象に少年スキークラブが結成された。また同時に「父母の会」も発足し、このクラブをバックアップすべく活動計画の作成、指導を行っているが、現在のところその成果は見られていない。

五　菅甲子良が文部大臣感謝状を受賞

地域スポーツの指導者に対する五九年度文部大臣感謝状が、菅甲子良（東古味）に贈られた。

昭和二五年から青少年の剣道指導や非行化防止に活動され、酷寒の寒稽古、猛暑の土用稽古など年間を通じ青少年の健全育成に励まれており、敬意を表するものである。

第四章　文　化

第一節　文化財

祖先が築き残した有形・無形の文化財を掘り起こし、調査して、保存、活用し、子孫に伝承していくという大きな使命を担い、文化財保護委員は、非常に地味な活動を続けている。

文化財保護委員が設置された当初は、一〇名であった委員もその後六名に縮小され、五六年から村の非常勤特別職に格付けされた。

四九年に県下でも珍しい郡文化財保護委員連絡協議会が結成され、郡一丸となって活動している。郡内五か町村の文化財を巡回する郡内研修会や県下の文化財を現地で実際に見て研修する郡外研修会を継続して開催し、委員の資質の向上に努めている。

本村には、上黒岩遺跡をはじめとする貴重な文化財が数多くあり、まだ埋もれたまま眠っていると思われるが、それらを発掘調査し、文化財指定し、保存、活用することを今後も永久に続けていかなければならない。

なお、現在の本村における指定文化財は、五八年一月新たに村指定となった三件を加え、国指定三件、県指定一件、村指定九件、合計一三件である。この一〇年間の本村の文化財行政で特筆すべきは、国指定文化財旧山中家住

美川村文化財保護委員

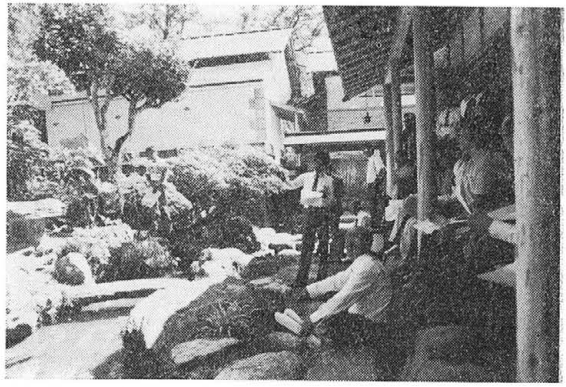
年度	氏名	年度	氏名
49～52	田本芳夫	49～	竹口渉
49～54	椴睿仁	49～	大西喜和
49	森岡通一	53～	伊藤孟寛
49～54	小椋伊十郎	53～	光田有
52	坪内要	55～	土居敏雄
55～56	黒川玄	59～	西口武志
57～59	谷原元三郎		

指定文化財一覧表（昭和五〇年以降異動のあったもののみ）

指定種別	指定年月日	分類	名称	所在地	所有者	備考
国	昭和四五年六月一七日	建造物	旧山中家住宅	上黒岩	美川村	昭和五〇年三月三一日所有者変更
県	昭和四六年四月六日	名勝	御三戸嶽	仕出	美川村	昭和五九年三月五日所有者変更
村	昭和五八年一月二〇日	史跡	東川村旧梅木家屋敷跡（石垣）	東川	片岡利通	
〃	〃	〃	宝筐印塔	大川	下中組	
〃	〃	庭園	土居邸庭園	〃	土居壽次	

宅の移築であろう。

第二節　旧山中家住宅



土居邸庭園を研修する郡内文化財保護委員

昭和四七年六月に上黒岩遺跡周辺が、県から「岩陰文化の里」の指定を受けたことに伴い、本県別子山村にあった民家で国指定重要文化財旧山中家住宅を、上黒岩遺跡考古館の下流約二〇〇メートルの地に移築して、上黒岩遺跡とともに保存活用することとなった。

年　代　この民家の由緒や建築年代は、明らかでないが、細部手法から推定すると一八世紀の中期から末期ごろに建てられたもののようである。

間　取　り　建物は、桁行（けたゆき）七間、梁間三間半の規模で、向かって左側に出入口を取る。平面は、桁行に三分し、いちばん上手は「ざしき」、次に「いま」を取り、この二室の前面に縁側をつけ、いちばん下手は表側に「まえ」、裏に「おく」をとる。間口一間半、奥行半間の土間を復原している。土間が狭く、部屋を一列に並べる間取りは、山村民家によくあるが、この住宅はその特色が特に顕著である。

構　造　上屋・下屋からなり、周囲の下屋を取り囲んでいる。内部は、差鴨居が多く、壁は板壁である。小屋は扠首（さす）組と棟束（むなつか）を併用している。

工事方針　工事は解体移築工事とし、解体に当たっては破損の状況など調査に綿密を期するとともに建立当初の形式技法、後世の修理事情とその内容を明らかに、古材についてはすべて再用するを旨として、古材及び新材などで修理し、取替材については旧規を踏襲して加工し、構造の堅固、部材の強靭を図った。なお資料の確実な後世の改変箇所は文化庁の指導並びに許可を得て現状を変更し、可及的に建立当初の姿に復原した。

工事の一切は美川村が事業者となり、設計監理は財団法人文化財建造物保存技術協会に委託、工事は一括請負工事として実施し、総事業費二七三〇万円をもって五一年一月から着手した。

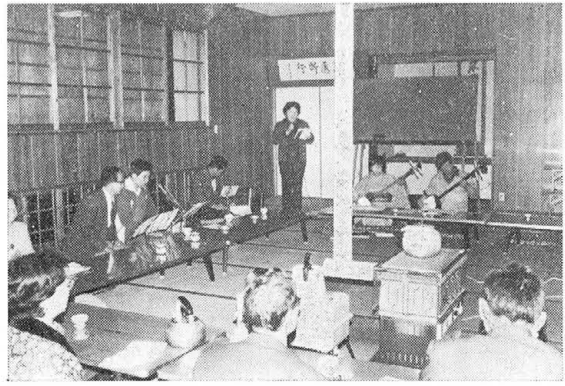
移築前の山中家住宅

移築後の旧山中家住宅

工事経過　工事実施に当たっては文化庁の指導を受け、解体に当たっては事前に綿密な実測調査、記録など資料の収集、写真の撮影などを行い、解体中においてもこれら諸調査を続行し、三月末に解体、運搬格納を終了した。

解体調査の結果、後世改変

地域文化祭で熱演する大川獅子舞
（昭和58年11月松前町民会館）



三味線・尺八・民謡の交流会

などについてもほぼ判明し、復原案がまとまり、文化庁に現状変更の許可申請を提出し、その許可を得て実施設計をたて工事を進めた。またこれに先立ち三月中旬には文化庁から担当技官の来村があり復原指導を受けた。

昭和五二年三月二八日工事の一切を終了した。

（注）工事方針及び工事経過の項は、文化財建造物保存技術協会が五二年三月編集の「重要文化財山中家住宅修理工事報告書」から引用した。

第三節　文化活動

昭和五〇年から四か年間「文化祭」が、村・公民館・婦人会・青年団の共催で開催され、その後五四年から「美

川まつり」と改称され、盛大に催されている。そのような中で、村内各地域で民俗芸能の保存グループや趣味活動のグループが次々と結成され、それぞれに活動していたが、文化団体相互の連絡協調を図り、地方文化の向上発展に寄与することを目的として、五五年六月三〇日に美川村文化協会が発足した。獅子舞、万歳、民謡、民踊・舞踊、三味線・尺八・琴、吟詠、書道・絵画・写真、俳句・川柳・短歌、生花・盆栽、囲碁・将棋・かるたの一〇部門を設置し、それぞれ独自の活動をするほか部門同志の交流会など盛んに行われるようになった。

美川まつりの芸能発表会や作品展示を最大の発表の場としているが、松山教育事務所管内の地域文化祭にも毎年いずれかの団体が出演し、郡内外の団体との交流を深めている。五九年には、地域文化祭が本村で開催されたほか、六〇年三月三一日には、美川村合併三〇周年記念文化祭が文化協会独自の企画・運営で盛大に開催された。

文化協会には、現在三八団体三三二人が加入している。